

Reprinting"Onna Sewayou Bunsho Taisei"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1441

翻刻『女世話用文章大成』

翻刻にあたつて

『女世話用文章大成』（上・中・下三巻）は手習い用の往来物で、既に拙書『考える女たち』⁽¹⁾では本書の一対の往来を写真付きで翻刻している。また、本書の歴史上の位置、世話字と世話用文章の特徴、元禄五（一六九二）年に刊行された男性向きの『世話用文章』との関係、女性向けに漢字を多用した本書刊行意義などについても、拙書で明らかにしているのでご参照願いたい。拙書ではこれに加え、本書が往来物にありがちな決まり切った用文章ではなく、当時の女性の会話を聞くような内容を持つているとその感想も書いており、その当時から本書の翻刻をしたいと思つていたのである。

本書は青森県弘前市立図書館蔵にかかるが、公の施設に所蔵されているものでは本書が唯一のものである。外題は「女世話用文章」上・中・下、内題は「女世話用文章大成」となっている。最後の奥付には次のようにある。

中野節子

書林

江戸日本橋南壹丁目

元禄十二庚辰天

五月吉日

須原茂兵衛

大坂本町壹丁目松寿堂

萬屋彦太郎

本書のどの往来文章も一段散らしであるが、ここではまず一段目を掲げ、続けて一段目を一段落して入れておいた。また、読点は筆者が適宜挿入したものである。
なお、本書の頭書及び、上巻末尾の「折紙目録したゝめやうの事」、下巻末尾の「よろづ折形の事并図」と「女手道具の図」は省略してある。こ下承を願いたい。

本書の翻刻に当たつては、弘前市立図書館のご好意、小泉吉永氏の多大なご助力を頂いた。ここにお礼を申し上げたい。

註

(1) 中野節子『考える女たち——かな草子から「女大学」』（大空社、一九九七年）。

おんなせわじやうぶんいやうたいせんじよ
女世話字用文章大成序

夫 (ふ) 女筆用文章數多有といへ共、其章句大形替事なくめつら

しからず、今此世話用文章ハ章句めづらしく、其上女の弁かたき難字を加へ、女子の助に顯し畢、此文章をよくく習練の上ハ万字疎かるまじきと、かへすく思ひまいらせ候 かしく

元禄十三度辰歳 五月吉日

前田氏息女さわ筆

○女世話用文章大成

一、正月遊び云やる世話さんしやう并返事

一、伊勢ぬけ参りの事云やるせわ文并返事

一、御物師雇にやるせわぶんしやう并返事

一、うせ物ぎんにたのみきたるやミ并返事

一、酒の酔に行合迷惑せし事云やる文并返事

一、花見に出悪口にあいたる事云やる文并返事

一、芝居見物に行し事いひやるやミ并返事

一、兄の事そりいひやるふミ并返事

一、折紙目録したゝめやうの事 目録終

此春は賑敷心うきたち、星ハ掛羽子夜ハ宝引にて、日を饋まいらせ候、終松も言旧く

夕もしも三更過まで、突鼻と鬪説居まいらせ候て、今朝ハ朝寝い

たしまいらせ候 かしく

何かたも是年は若榮候て、爰もともに夜昼と賭祿にして嘉留多打、

藍も五更かたまで起居候て、東雲のしらむ折からしまひませ候、屑そもし様にも弄に御出候へかしと、御尊のミ申まいらせ候 かしく

つれく成仮に不図思ひ出し、筆染まいらせ候、一昨年の今日はお伊勢様へ参り候とて、未明にそもし様へ

身のまゝぬけ参り候、其時の醜さ濾聲候事そんしいたし、可笑独笑いたし居まいらせ候、追手やかゝると、臆病神にひかれ候事、今に忘られず候 かしく

仰られ候ぬけ参りの事、去年のやうにそんし、指折いたしみまいら

せ候へ、最早三とせに

成まいらせ候、くハラム矢の」とし、日の斜るは間のなき事と存せられ候、間の山のをもじろさ、颶々踊のしほらしさ、今にわすれかたく候

縫物段くつかへ候て、途方に暮まいらせ候まゝ、年齢なる御針候

ハゝ、御雇下され候

御そんしの通、通例の手理は旦那殿気に入申さす候但、万事締

に美敷したてくれられ候人を、たのみ上まいらせ候

此御物師何方此方へ参られ、人並に仕立られ候やう、いつかたても被譽褒美御さ候、偏に其身の手柄と申」とい候、手續よくし」と擬候ハゝ、しかぬる人にてなく候ゆへ、雇しんしまいらせ候

無和利御むしん申、御氣骨おらし候まゝ、忝思ひまいらせ候、嚴御申下され候へとも

実否しれまいらせ候ハんよし、足裏に疵持たるものは、治情あらかふ物にて候、機不應ながら、説破なされ下され候うへは、疑事御さなく候

失物の事、此ものに問ぐれ候へとの事、段く吟味いたしまいらせ候へ共、証拠正しくいひ分召れ候ゆへ、必定うち付て教訓成かたく候

そもそも頃員偏頗もいたし候やうに、思召候ハんすれ共、全我身荷膽ニテハ御さなく候、此うへハ又御しあん候て、外の御料簡なされてよろしく候へく候と、そんしまいらせ候

昨日去方へ行候道にて、一杯機嫌の若者西風東風つけ廻、生憎と思ひ

まいらせ候へとも、さながら喚事も得いたし申さす、剩つれしものハ這出者にて、愚鈍ニ候て邪魔に成、足早に逃かへりまいらせ候かしく

垂登者に出合なされ危めに御逢候よし、其よう成隨馬醫にハよき程に會釈

欺たるかよく候、傍邊に人目め候ハんまゝ、別の事も候ましけれとも、まづく何の怪我過も候へて、めてたくそんしまいら

せ候

よもやま はなさいちうさかり
四極山の花最中盛のよし、散なは可惜と思ひ、鼠栗／＼見物にまい

り候へは、颶颶颶の幕の内より一能くといふて

所有さしあひ悪口のほめことは、倍々恥敷もまたおかしく、一々

ろ棒、与得花ミる事も得せず、特日もくれにをよひまいらせ候

ゆへ、ちよ／＼奔してかへりまいらせ候 かしく

ひがしま はな
東山へ花ながめに御／＼し候よし、御器量すくれまいらせ候御姿を
見候て

さま／＼とほめ言葉申まいらせ候よし、そもそも様の壯年をミまい
らせ候へ、悶虚勞／＼としてあたぐちき／＼候も断て候、倍々

似物とそんせられ候

かぶきしばる はやり
歌舞伎芝居葉流候よし風聞候ゆへ、嫂とつれたち見物に参り候へは、
濡お／＼邪氣乱

狂言ニて、真味理としたる事なく、指合たらけニて候、無術悚か
ね、半に立かへりまいらせ候

わがみ
我身も人に誘引、敏乍こしらへ、咄破喝破として貞ミ／＼せ見に行候て、

折ふし

茶屋に休ゐまいらせ候へ、そもそも様御通り候ゆへ、黙頭まいり
せ候へとも、見ぬふりして御行候事、難面と恨に存まいらせ候
私兄さま無人望、仮染の事も気短、大語にしかられ、何莞爾と優
き事なく

此方の兄様も変事なく強義に候て、自在な所行致され候へとも、妹
に生れし悲しさは
可愛いしらい、却降参いたしくらしまいらせ候、何方もミな
何不別同し事ニ候、兄弟ハ他人のはしまりと、世話にハよく申ま
いらせ候

○女世話用文章大成 中

一、娘まよひ子に成候事しらせやる文并返事

一、あつらへ物ねん入いそぎにやる文并返事

一、男童隙を出す事いひやる文并返事

一、孫長敷成しを悦ひいひやる文并返事

一、仮寝して夢に魘し事云やる文并返事

一、婚氣に入しとて悦びいひやる文并返事

一、大へい成内義をそしりいひやる文并返事

一、妹を大名奉公に出せし事云やる文并返事

秘藏の娘まよひ出、去邊しれ申さす、妻夫ともに周章迷脇東西と
尋候へ共

しけかね、天命に神仏さまへしゆくわんかけ候へハ、神仙様
の御かけにて、指南人つれかへり給り、佛々とよろこひまいらせ
候御事ニ候

此瀑時勢の蠶不結たる大形に、染させ下さるへく候、往時模様は辞
ニて候、其うち仰山
地散靡そめ色候まゝ、よくく染物やと御たんこう下され候て、
はんくよろしく頼候へく候、又いつ比出来申し候や、御しらせ
下され候へく候、めてたくかしく

帷子の事御申越候、我身かたへ出入いたし候紺屋御座候、今朝も参り、
種ぐ砂多の不手留風流な雛形見せまいらせ候、幸作意よき

上手にて御さ候まゝ、此もの喚につかハシ、よきやうにそめさせし
んし候へく候、そもそもは日比苛ニて候まゝ、すいぶんいそかせ
忽にいたしをき申ましく候、しかし早俗にいたし候へく候、そめ
きへあしく候まゝさやうに御心得候へく候

稚無不知古に迷ひ子に御成候よし、連剥帰るさを御忘れ候物ニ

て候ハん、嘸其折柄の御しんもく

愚弱理とあそはし候ハんと、おしはかりまいらせ候、さてく皆

式そんし候ハて人ニても申まいらせ候ハて、御怨候ハんとめいわ

頃日頼入候、あつらへ物恰合見繕に与得ねん入、自墮落になきや
うに御拵たのミ候
無遺瀬やうにおほしめし候ハんすれども、便くとなく急く御

こしたのミ候、生付の癖にて氣せきまゝらせ候、何さまのちほと見且まいり、御めにかゝり申まいらせ候、かしく

御説物夜接日候て手にくいたし目一時の間にしんし候へんと存まいらせ候所におもひの外

出来申さす、此中ハ入身うそはらたち距果まいらせ候、片時も油断いたし申事ニテハ、御さなく候まゝ、追付立派にして、近内に持せ進し候へく候まゝ、さやうに御心得候へく候、かしく

いとくの孫居座候て座敷中を這躊、幾等傍に有物何と事なく廻散、詞は脂茶をいひ泣出し、さるとハ大膽者親ももてあまし
かんばうたをし、貌も瘦はて、いかひ世話ニテ候、しかし、動乳をあまし目を見つめ、卒死をいたし候、若抱瘡の煩熱ニテもや候
へん」と案しまいらせ候、些御越候て、御覽下され候ハゝかたしきなくよろこひまいらせ候、かしく

折角御肝煎下され候男童、常強者ニテ旦那殿事も籠抹に致し、安忍をおこし、其うへ看く成

詐事を申傍輩つきあしく候ゆへ隙をつかハし候、小飼の者にいたし向後なかくつかひ候へんとそんしまいらせ候へとも、堪忍成かたく真平如在思召下さるましく候

御奔走の孫子さま、おとなしく、人臆面もなく悼く阿和晒手打くの真似

流石氏より生長にて温蕩なる生質、有福にミヘまいらせ候、熱氣出で御氣つかいに思召候よし、さためて寢冷か知恵ほとをりニテ候ハんまゝ、御きもしなされましく候

重一色拂にて不縋者と存、適申まいらせ候所に、皆目長敷所なく、無多口きゝ差別もなき奴のよし

人はうわがハニテハ見へぬ物がハと存せられ候、親許へ送届、伝

心氣つかれ草臥候ゆへ、ひよつと仮寝いたし候、夢に雨微降夜共惠行ともしらず

憤然と出まいらせ候へは、ミチの真先にわかひ女子、跋髪を乱、徒空念としてゐまいらせ候、戰慄泣叫麿まいらせ候、目覚ての

うれしさ、身うちにしつほどりと汗かき居まいらせ候

御真眠候へは、無逢轍夢御覽候よし、さやうの時ハ氣疎宿もの

て候、能く存候へは

夢程不思議なる物ハなく候、おもひかけなき事を、ありくと見

る事まゝ多く御さ候、其内あしき夢を見まいらせ候時ハ、氣にかゝり氣味のわるき物ニて候

かしく

喚向まいらせ候婚中く健人ニて、我身事面倒にも思へれず、孝行ニしてくれられ、皆く鐘愛、悦申御事ニ候、其うへ不忍の心すきとなく

浮波くと雛相成所ハ、卒度もなくうちつき、物の云為一つとして徒事も候へて、世諦かたハ万事に氣をつけ、始末しられかしこき人ニて御さ候、心たてしんまくなく、儻として、人のすぐ客議ニて候、左右人は心ニて御さ候

かしく

御玉章なかめ入まいらせ候、何さま女子の詞に勿云勿為などといふ事、常の女子いわん事ニて候
まことにたちハぶりを顕とやらん、湯女・傾城のはてのやうにみへまいらせ候、曠人事ニて御さ候、人を向下候事、身の程しらぬ人と殊咲く思ひまいらせ候 めてたくかしく

仲人申入候御婦子様、御心に入候よし、何より嬉しく候、早晚ちよつと御出ニて候ゆへ

許諾姑様へ心つけ第一になされ候へとまいらせ候、又ハ如鼓くとはしちかくへ出、漂輕らしきはなしなど、大語になされましきと申まいらせ候へハ、合点のよき御人ニて、輒然とまいらせ候て御さ候 かしく

先文字始て御けん成候御内儀様、去方ニて又出合まいらせ候か、人

を云平懐腑悪人ニて候

身成行一風候て何とやらん物のはてのやうに、そんせられ候と、ミなく謐僉議区ニて御さ候、かさねてつきあひ申事へいやニて候と申事ニて候

人は心程の縣世と申事妹ニて思ひ当候、幼稚の時より氣の引張たる

瑞恵奴ニて、大名奉公より

まいらせ候か此頃ありつき、十三ノとして下りまいらせ候、し

かし母様よろこひの中のなげきにて、今生ニてハ逢事ならぬやうに

思召、恋憧憬させ給ひ、轟めいわくいたしまいらせ候

○女世話用文章大成 下

一、加茂の競馬見物に行し事云やる文并返事

一、お物師紅たち損ないし事云やる文并返事

一、けし人形もらひ礼をいひやる文并返事

一、大名奉公の目見へ出立を間にやる文并返事

一、きぬの襦袢そめやう頼にやる文并返事

一、初雪ふりながめ入酒宴の事云やる文并返事

一、くわんをんめぐりせし事云やる文并返事

一、よろづ折形の事并図

一、女手道具の図

る、おもしろき

見ものにて御さ候、何としてか太逞馬斑人くんじゆの中へ騒騷

といなや、是抑いか成事が出来ると恥怕、をし合、僵半死したる人

多御さ候、かさねて参り候事いやて候

自も五月朔日足そろへに、過し年まいり候か、相國の太鼓丁扣と

驅出し

勝負の木のもと迄颶と入、崔嵬をあらそひ、凱音あくる早俗を見

まいらせ候へハ、少氣成ものは、中ノ氣の減事ニ候、見物の官衆

活くとして声をあけ為答をと、地響いたし、物廓然き事ニ候

摵にいたし候半与存、紅壇疋此中濃御物師に擬まいらせ候へハ、

縫め唱斜無作口作としたる、仕たて棊のかけやう、纏などもせ

はくして散々の物ニて候、あれニても物ぬひニて候などゝ、呀事、

人を儻獨やうな事ニて候

大事の御小袖段々に裁崩、其上仕立もよろしからず候よし、阿房敷

殿達に唆され候て、加茂の競馬見物に参り候、中ノ何より治合あ

事ニて候、不會候ハゝかたから取つく事、いらさる物ニて候、縫括云
たてニて

御奉公に來申候よし、口入の人も知ぬといふ事は有ましく候ニ、か
へ候やうな事ニ候、親は名たかき仕立しやニて候よし、聞まいらせ
候か、漸く其くらゐならハ、價授いたし候はかりニて候ハん、ま
ゞ」と手理の子ハ手槌と申まいらせ候事、此人の事ニて候

弄として乙松かたへ幼氣なる器業人形しなく給り、重宝いた
し多集蒐並置
弄として乙松かたへ幼氣なる器業人形しなく給り、重宝いた
し多集蒐並置
一切と打詠まいらせ候、中にも捻合相扱して居申候やつこ却含一
しほ可笑、咄笑、祖母様も冷喫して御さ候、御礼のため申入ま
いらせ候

御心安さのまゝ窺のため文して申まいらせ候、御目見への上服は
縮緬の地白けんしもやう、金紗入

帶ハ紺繡子をいたし補襷ニて、下髪缺腋にして、出申覺悟候て御さ
候、此通ニてよく候ハんや、御申を頼上候、又く何時ニまいり可
申候や、御さつし待まいらせ候 まち かしく

細々との御せうそゝ、詠入まいらせ候、衣裳つきの品々御申こし候、

中ゝ奇羅美なる御出たちニて候
峠をめし竹輿ニて御越候へく候、日英に御迎に人しんし候ハん

まゝ、御拵候て御待候へく候、首尾よく相済候へ、直に御湯も
の有筈ニ候まゝ、浴衣なども御用意候て、よろしく候へく候
かし

く

此絹襦袢にいたし、肌に着候へく候と思ひまいらせ候まゝ、鬱金に染
下さるへく候、礎茶の下衫も

愛想にも成候ハんとそんし、余所より貰まいらせ候ゆへ、しんし候
所に、扼して居まいらせ候躰、放廣可咲との事
」もどりても打より沼田うつてわらひまいらせ候、其許心膜なる
御嬢様さへ、忍笑し給ふとの御事、大かたならぬ興に成候と、い
かほどがまんそくにそんしまいらせ候

もはや襦袢に成候て、きられ候ハす、千賀茶のは外母にとらせ、
其外ハ袴つきてき候へく候、見苦敷數なく候て、常住着にことを
かきまいらせ候

汗衫動下くとやふれ、ことかき遊され候とて、染させくれ候へと

の御事、御好の色より、下地を藍ニそめ

瑠璃紺か檳榔子になされ候ハゝ、よろしく候へく候、又ハ萌黄ニて

もよく候ハんと存まいらせ候、世間ニ憲法そめいたし候事、世帶も

ちのする事ニテハ御さなく候 かしく

珍敷初雪降發く詠、古歌など吟しまいらせ候へは、女子共陰氣な

偏廻と申て、雪消にて

酒を湛とのミあひ、後ニハ心そけ顔尤赤になし、たかひにしいや

ひ、時行小うたうたひしともなくして暮まいらせ候 かしく

こなたにも花の雪吹にまかふ雪をあつめ、雪転雪うち、氷か泮にさゝ
ひとつなどゝいふて、閑居離の

水あびるやうに總咸に醉つふれ手車にのり、重祭く、蹲踞くと

申、女子のあはれ申事、馬子成事と銀評どしかりまいらせ候、都詰
所ハ主の名たつ事ニ候

觀音巡致候半とそんし、行暗しふんに内を出候へは、霧深真闇ニ

て、人おもてもミへす、杖ニテ探廻

漸く道筋に出申候、親たる人され候ハ、夜ニ更、東しらみてか

ら出候へと申され候を聞入す、情強ニ出、道ニテ何程か後悔いた

しまいらせ候 かしく

我も東雲未明うちに、歩行候へは、思ひの外難義なる迷ひ道に出、

方様ニも此ほど觀音詣での折から、御踏まかひ候よし左行右行なさ

れ候ゆへにや、かさねてハ夜深にハ、いらぬものニて候